（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　青柳かおる

本論文は、１２世紀後半のアシュアリー派の思想家であるファフルッディーン・ラーズィーの宇宙論、特に現象界と霊界（不可視界、天使、中間世界）という２つの世界全体についての包括的な議論を取り上げて、彼が、伝統的な神学の中にどのように哲学と神秘主義の思想を取り入れたかを考察し、ガザーリーやイブン・アラビーなどと比較することによってラーズィーのイスラム思想史に占める位置を明らかにしたものである。

ラーズィーは、神の属性や創造の問題に関しては従来のアシュアリー派と同じく哲学者を批判している。しかし、宇宙論においては、アシュアリー派の原子論を現象世界に限定し、従来のアシュアリー派が認めなかった非物質的実体としての霊魂の世界の存在を肯定している点で、哲学の影響が明瞭にあらわれていることが本論文によって明らかにされた。次にラーズィーの主著である『コーラン注釈』にあらわれるミゥラージュ（預言者ムハンマドの天界飛翔）解釈を分析することによって、現象界と不可視界には相関関係があり、人間霊魂は現象界から不可視界を通して神に至るとされる部分などに神秘主義の強い影響が見られることが明らかにされた。

宇宙論を現象界と霊界の存在論的議論に限定してしまったために、当然とりあげられるべきであった人間霊魂についての議論や天体論などが無視されており、ラーズィーの思想の全貌を明らかにするためには、残された課題は少なくない。しかし、従来のアシュアリー派神学の研究はガザーリーまでに集中しており、ガザーリー以降の神学の発展に関しては、まだ十分に研究されておらず、特に本論文の主題である、ラーズィーの哲学的側面を具体的に明らかにした研究や、ラーズィーの霊界に関する研究はほとんどないので、本論文はイスラム思想史学に対する貴重な貢献として、高く評価できる。以上の点から、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると認められる。